

キブツと日本農業

(於長崎県庁舎会議室)

手 塚 信 吉

一、産業革命の試練を知らぬ日本農業

只今ご紹介を頂きました、日本協同体協会の手塚でございます。副知事さんのご紹介にあった通り、私は八十一才の老骨であります。誰の体験でも参考にはなると存じますので、暫くご静聴をお願い申し上げます。

「日本の危機」そんなことをいくら叫んでも、本気で耳を傾ける人は少ないと存じますが、実は、危機とは、そんな日本人の呑気さそのものかも知れません。

今の日本に三つの危機がせまっておりますと存じます。その第一が食糧危機であり、その第二は公害危機であり、その第三は不労所得危機であります。そして、日本の政治も、経済も、この三危機悪化の方向にだけ動いておりますが、奢る平家の二十年、屋島、壇ノ浦の危機に公達はだれも気付いておりません。

工業の発展は素晴らしく、世界一を誇り得るものが三十二種もあります。三菱重工長崎造船所もその一つであります。

外貨の保有高も世界第二位、GNP世界第二位、だがそんなものを自慢してみても、総くずれの恐れある日本農業を考えると、心あるものは背筋に氷水の思いであります。

農は国の基、農村は民族の温床、それは昔も今も変りはありません。国民の生命源である、食糧対策を誤ることは国難第一となります。故西独アデナウ首相は、自給食糧七〇%を割ることは、独立国の資格を失うことであるとして、EEC小麦協定でも一步も譲らなかつた話は有名であります。

すでに、自給食糧五〇%を割っている日本が、果して独立国の資格ありや否や、故西独アデナウ首相の警告を待つまでもなく、真剣に考えさせられる問題であります。

今の日本は農家あって農業なし、と誰かが評しておりましたが、産業革命の試練を忘れた日本農業は、経済的には破綻しており、農家が生きのびているのは、手厚い政治の庇護によるものであって、禁治産農業化している



庁舎会議室におけるキブツ講演会

のであります。

そのために国民は、米でも、野菜でも、肉でも、牛乳でも、世界相場の二倍から三倍もする高価な農産物を食わされているのであります。それでも農家の泣き事がたえない、嫁が無い、あととりが無い、一寸先は暗いという農村の実状であります。過保護農業の末路の姿として笑っていられる問題ではありません。

世界で一、二を争う日本工業の発展は、産業革命の試練の賜というも過言ではありません。その高度近代文化国家の中で、農業だけが昔のままの零細個人百姓、猫額大の農地にしがみついて、農業の使命さえ忘れて、合理化も近代化も不可能になっています。最近になってその必要にせまられて、共同作業化も流行して来たが、姑息で不徹底で、抜本対策には何の役にも立っておりません。

いくら日本でも、近代化農業というからには、一企業単位を水田なら五十ヘクタールか、百ヘクタールの二毛作農業、牧畜なら百ヘクタールか三百ヘクタール、乳牛二百頭乃至三百頭規模が絶対必要であり、この程度の経営規模でなければ、時代感覚に目覚めた青年男女は寄り付きません。

貴重な祖先伝承の農地六百万ヘクタール（

最近、多少減少しているが）を持ちながら、

農産は年々減少の一途を辿っており、少々余り気味なものは米だけであって、米に代わって主食化しているパンの原料小麦の九〇％、日本人の嗜好食であり、蛋白源でもある、味噌、醤油、豆腐、納豆、豆麴、大豆油等々の原料、大豆の九〇％、砂糖、塩の八〇％、家畜飼料の八〇％、乳製品、牛豚羊肉等々、輸入依存度は急増しており、自給率はすでに五〇％以下と言われているので政治家の魔ノ手が噂の種となっております。

生産性の低い農業に対しては、どこの国でも保護政策をとっていますが、それは農地を有効最大限に活かすためか、生産奨励対策であって、生産制限の奨励金を出したり、非効率採算を価格で保証したりする例はありません。殊に世界的食糧不足が重大化しつつあるとき、正に人類全体への冒瀆でありましよう。

農業保護政策が悪いというわけではありませんが、荷馬車屋を保護するために、トラック業を禁ずるような農業政策を改めるべきだということです。百俵の米を百キロ先に運ぶのに、荷馬車を使えば十台の荷馬車で三日がかり、



48 . 8. 23 . 長崎県

一俵当りの運賃が二千円でも引合いますまい。それが大型トラック一台で往復五時間、一俵の運賃が五百円以下です。零細個人農業を米価で保護することは、丁度その荷馬車屋の保護に等しいものであり、時代逆行の愚策であって農家自身のためにも不幸であります。農業といえども産業界の別格的存在ではありません。他産業と同様に、産業革命の試練

を免れることはできません。国家が支援助成するのは、その近代化農業の奨励であり、促進助成であって、目先の利己心を満足させるだけの、不当米価のつり上げではないと存じます。

そして、日本の実状からみて、農業近代化

二、零細個人農業は国を危くする

現に米価は世界相場の二倍半ぐらいであります。零細個人農業を固持する限り、三倍四倍になっても採算価格に迫っていくことはあります。米価があがれば何でもあがる。価額を押えたら生産減退に迫るだけ。輸入食糧はどんどん増大して、西独の故アデナウ首相の警告どおり、独立国失格、国亡びて零細個人百姓残る、という悲劇にもつながるのであります。

狭い狭いという日本国土ではありますが、総面積三十七万平方キロ、その内人間の住んだり耕したり出来る平坦地は十二万平方キロにすぎませんが既存の農耕地だけでも六百万ヘクタール（最近多少減少したが）他に牧野

のためには一村共同化、または一部落共同化が絶対必要であります。迂遠なようでも先づ農村農家に協同協力の思想精神を徹底的に普及する必要があります。心ある農家は協同化の必要を痛感しているので、対策次第では急速に進展するであろうと存じます。

適地が四百万ヘクタール併せて一千万ヘクタールもあり、それに世界でも稀な温暖多雨であって、適地適作よろしきを得れば、西欧各国の農地に比較すると三倍の真価があり、日本の総人口が一億五千万人になっても、自給自足可能であるといわれております。

そんな日本が、輸入食糧に五〇％余も依存しており、農産物価格が世界相場の二倍三倍、それでも猫の如くおとなしい。そして、呑気な国民は大して騒ぎ立てず、賃上争議にその活路を求めているだけであります。

日本農業をここまで悪化させた元凶は、無定見な政治の罪でもあります。そんな政治屋が何回でも当選確実、これでは国民の自業

自得という外はありません。だから、迷惑しているのは農家そのものであります。その唯一の証拠が農業に農村青年が寄り付かなくなっております。

本年度の農林予算をみますと、各省の首位であり、食糧会計の赤字を加えると二兆円にもなりましょう。それが一体何処に生かされておりましたか。米でも、野菜でも、肉でも、世界相場の二倍三倍、国民も反省する時でありましょう。

一方農家は、農業では生活ができず、妻子を置去りにして、都会で不自然な出稼ぎ労働これだけでも、国の将来を考えたら、一日も放任の許されない重大問題であります。

四方海に囲まれた日本が、自給食糧五〇％は危険信号どころか、危機一発の運命に国民をさらして平然たるもの、そして、国を挙げて紙幣の奪い合いに無我無中、いや紙幣の紙屑化促進に懸命であります。

政治家が一言でも口外したら落選必須であります。戦後の農地改革で、農地を細分化して、小作人に私有せしめたことは、時代逆行であって、貴重な農地の経済価値を零にしてしまったのであります。

『青い地球は誰のものでもない。』地球の部分

の農業事情を研究すると、各国の食糧自給率と農業人口がイギリスでは自給率五〇％で農業人口五〇％。西独では自給率七〇％、農業人口七〇％。フランスでは自給率九五％、農業人口一〇％。イタリヤでは自給率八〇％、農業人口一〇％等々となっておるのに対して、日本は自給率六〇％、農業人口二八％であります。

そして、日本には専業農家は一〇％以下でありまして、あとは零細個人農ですが、殆んど副業農家であり、近代化農業への意欲がありません。あるのは土地値上りの欲望だけ、近い将来、日本の致命傷の零細個人農業による、食料減退でありましょう。事業界引退の機会に、西欧農業事情を視察して対策を考えようと、一九六二年十月出発しました。

六十日間の西欧農業研究も参考になりましたが、その話は省略して、帰途イスラエル国に立寄り、キブツという共同農業を知り、アッこれだ！これこそ日本の国情からみても、学ぶべきであり、新しい時代の生活原理として注目すべきものとみたのであります。

そこで帰国早々、三ヶ月を費してキブツ見たまま聴いたままを一冊の本にまとめて『新しい農業キブツ』と題して出版したところ、

である土地は誰のものでもありません。宗教では神のものといいますが、人のものといった例はありません。その誰のものでもない土地に国境を画したり、私有化したりするから戦争にもなるのです。人と人の争いにもなります。

特に日本のような、太平洋上の孤島、一億血縁関係にある国柄であります。私有せしめて奪ったり奪われたり、争い合う必要がどこ

三、キブツに学べば日本農業も蘇生する

私は北海道日高地方で或る事業をやっておりましたが、停年退職者が安定した余生を送るために、共同農場を計画し、浦河町東町に七十八ヘクタールの原野を買収して開墾し、浦河興農園と称して、すでに退職者三人が入園しておりました。ところが、昭和二十三年の農地改革で、法人経営の農地は強制買収で殆んど無償同様に没収されてしまいました。戦死した幾百万の若者を考えても、土地など無償で取られても、それが国のお役に立つなら異議はありませんが、何と百余件に分割

にありましょうか。

世界一の人口密度、寸土といえどもあだやおろそかにできません。貴重な国民の生命源を生み出す農地の無駄使いをされてはなりません。

人間の作った法律が許しても、真理の神が許しません。その真理への反逆が食料危機となつて、全国民を恐怖のドン底に追い込む時が必ず来るであります。

して個人農業化してしまいました。もちろん、これは全国的に断行され、法人農地も、地主農地も、殆んど無償同様に何百万分に切りきざんで、小作人や小農に分譲してしまつたのであります。

全く時代逆行であります。買収して、大型近代化農業に転換するなら話は判るが、細分化して零細個人百姓に分配するなんて、日本弱体化の外の何ものでもありません。再改革を勇断して近代化農業に転換すべきだと、常に力説して居りました関係もあり、欧米各国

日でも、イスラエルのキブツは二五〇集団、人口約十万人にすぎません。だが、その影響する思想は、全国的に及んでおります。

キブツの基本原則は『先づ自由意志による団体であり、何人も加入も脱退も自由であること。』『民主主義社会であつて、全ての決定は多数決によつて行われる。』『集団主義社会であつて一切の財産は集団の所有であり、生産、分配、福利厚生等集団的に組織されている。』そして『各人の能力に応じて働き、各人の必要に応じて分配することを信条とする』平等社会であります。

キブツのメンバー数は大は二千人ぐらゐから、小は二百人ぐらゐまでであるが、平均すると子供も加えて四百人ぐらゐであり、新しく加入せんとするものは、普通一ヶ年の候補者期間を勤務し、加入を希望すれば総会において投票により可否を決定することになります。新加入者は個人の資産があれば全部キブツに譲渡する。後日そのメンバーがキブツを去るようなことがあれば、キブツはそれを返還する。そして、キブツは新メンバーに対しては平等にキブツの財産能力に応じて、そのメンバーと家族の扶養義務を負うのであります。キブツメンバーが働く能力を失つても、ま

珍しさもあつてよく売れまして、その読者から共鳴、感激、賛成等の書面が六百余通も参りましたので、そんな人々を頼りにして、日本キブツ協会を設立せんとしましたが、友人知己も誰一人参加してくれませんでした。同年十二月からは、宣伝のために月刊キブツと銘名した雑誌を毎月二千部発行して、青年雑誌の読者宛に無償で郵送したのであります。その内に反響もあつて、座談会や講演会の依頼があり、多忙を極めておりました。そして五年後、漸く各方面の有力者多数の参加を得て、農林大臣認可の社団法人日本協同体協会が設立され、今日に至つております。

そして、キブツの視察者も次第に増加し、長期滞在、研修を希望する青年男女も次第に増加し、一九六五年以来、年々一回乃至二回、キブツ研修生を募集して、選考の上で合格者をイスラエル国に送つておりますが、その総数は三百六十余名に及んでおります。

それではキブツとは何か？詳細に説明する時間がありませんから、概要だけ申し上げますが、キブツとは集団的生産、分配、生活のための人と土地と資本の集合体である、といえます。最初に生れたのが一九〇九年で、キブツ・デガニヤでありますが、六十余年後の今

た死去しても、その家族扶養の義務を負う。

また、もしメンバーの両親祖父母が生活に困っている場合にも、キブツの経済力に応じて資金的援助を与える。そして、希望すれば労働能力の有無に拘らず、キブツ内に住居を与えて扶養するのであります。

要するにキブツでは、もし、各メンバーが一般社会で生活する時、果すであらうあらゆる義務を、そのメンバーに代わり負うのであります。

共同の財産及び生産の利益も、一切分配しません。もし、メンバーがキブツを去ることがあっても、財産の分配はありません。丁度、日本の財団法人のようなものであります。

もっとも、去って行くメンバーに対して、キブツは斯の在籍年数や功績に応じて、離別金を与えることを通例としております。それは日本の退職金のようなものであります。

歴史をみると日本でも、徳川時代の五人組制度には、可成りキブツ類の助け合いが実行されていたらしい。また、中国でも昔から互助組の制度があり、これが基礎となって合作社となり、今の人民公社に発展し、急速に近代化農業に転換ができたといわれております。

近代機械化経営に最も適しているものは農業であると言われておりますが、その高度な機械化作業や科学技術が必要とする近代化農業は、もはや個人企業を不可能にしております。

だが、自然を相手とする農業の資本主義的経営は、イスラエル国でもことごとく失敗

四、貨幣を追いかける農業は

イスラエルでも失敗した

しております。農業移民部落から始まったキブツは、労使無き経営形態であり、全員が労働者であって、全員が経営主であり、各自の天分資質や英知を結合して美事な業績を示し、協同協力の集大成として、僅かの労働で高文化生活を可能とし、新時代の人間社会の在り方として、示唆に富んだ形態なのであります。

キブツを社会科学的に表現すれば、人間平等観と労働尊重との徹底した社会といえよう。また、キブツを経済学的に表現すれば、搾取も不労所得も無い皆労働社会といえましょう。人間平等観が徹底しなければ真の民主主義社会は生れません。労働尊重の思想が徹底しなければ、労働から貨幣を切り離すことはできません。人間社会の不幸の大半は労働売買からはじまっています。いくらイスラエル国でも、労働を貨幣で釣る資本主義的農場はことごとく失敗しているのであります。

キブツの成功も発展も、労働意欲を貨幣か

ら人間の良心に転換し得た点にあります。『人間が神に近づく唯一の近道は労働である。労働こそ生きる権利の手形である。』このゴルドン博士の労働哲学が、近代ユダヤ人を反省せしめ、労働尊重の思想となり、パレスチナの土を愛し、土と取組んだのが、ギブツの発展であり、再建イスラエルの確立ともなったのであります。

今日の日本農家は、あまりにも貨幣を追いかけて、貨幣を過信するところに不幸があり、不安定があり、近代化農業への立遅れともなっているのであります。もちろん、これは農民だ

けの責任ではありません。

労働意欲を人間の良心に求め得たキブツの発展は目覚ましく、最近、工業方面への進出が圧倒的であります。開拓農業から出発したキブツが、次第に人口増加に伴って、自家用の家具寝具等の製作から発展して、一大家具工場化したもの。農業用トラクター、其の他の修理工場から出発して、農業用土木工用機械工場に進出したもの等々、今日では大半のキブツが工業に進出して、総収入に於ても農業収入三に対し工業収入七程度になっています。

十一年前、第一回キブツ視察当時、キブツでは優秀技術者の有給雇用が問題となっていました。最近では労働意欲を賃金で充すよりも、より多くキブツに寄与したという満足感の方が、はるかに高いことが立証され、反って無給労働こそ、良心的名誉欲となり、最高技術の発起ともなっているといえます。正直者が馬鹿をみる、ずるい奴が得をする日本では考えられないことでありましょうが、人間が良心的に安心して生活できる社会、それは生老病死苦から開放された共同社会キブツを真似てこそ、実現可能であります。

農業を、出稼ぎ収入で補てんし、三ちゃん農業化した農業を最後の砦として、自分たちだけの安定を考えているらしいのであります。アメリカでも、カナダでも、農業人口は総人口の一〇％くらいであります。余剰農産物の大量輸出であるのに、日本の農業人口は、総人口の二四％というのに、世界最大の食糧輸入国であり、自給食糧五〇％とあつては、もはや日本は独立国の失格者であり、自衛も国防も何の意味もない国になっております。

五、日本農業の活路は 一村協同化あるのみ

農業は個人に限る。これは明治以来変わらぬ日本農政の基本方針でありました。そして、農民の私的欲望を刺激する政策に終始してきたので、日本の農民には協同体思想が全く育っていないのであります。

そして、零細個人農家の優遇政策ばかりとって来たので、自主性を失ない、困れば陳情で国費丸抱えの様相を呈して来ましたので、時代感覚が育ちません。だから、猫額大の私有農地にしがみついて、非能率、不採算赤字

前述した通り、日本は世界稀れな、温暖多雨国であり、適地適作よろしきを得れば、既存農地だけでも、自給自足も不可能ではありません。世界的食糧不足を訴える時代に、補償金まで支給して休耕田三〇万ヘクタールも、あくびをさせておくとは、天罪を恐れぬ日本という外はありません。

日本は地形関係もあつて、農業規模も中小規模は止むを得ないとしても、近代化農業としての経済的企業には、一企業単位を水田なら五十百ヘクタールの二毛作農業、牧畜なら百一三百ヘクタール、自家用飼料中心の乳牛百頭一三百頭農業を必要とするのであります。その為には、一村協同化または、一部落

協同化が絶対に必要であります。そして、今日の零細個人農家の大半は、協同化の必要を認めています。失敬例があまりにも多いので、二ノ足を踏んでいるのであります。

お隣の中国でも、孫文の辛亥革命以来、農民解放の旗印として『耕者有其田』とし、農民に希望を与え、革命軍に協力させたことが一勝因でありました。一九四九年、北京政権成立と同時に、公約に基づいて小作人に農地を開放したのであります。

多年、地主階級に搾取されていた小作人たちが、耕作地を貰って大喜び、手の先、足の踏むところを知らず、という状況でありましたが、さて開放されても、一農家当り日本流にして三反歩か五反歩であり、干魃か水害でもあると忽ち飢餓民化する外はないのであります。

毛沢東さんの勇断は、近々十年にして世界農民の三分の一に当る中国農民を結集して、人民公社の確立となり、片端から近代化農業に転換整備され、世界の耳目を驚かしているのであります。

東亜の主体国を以て自ら任ずる日本の今の旧態農業は日本弱体化の外の何ものでもありません。逡巡十年に及べば、革命の導火線と

もなりかねないでしょう。

賢明な農民自らの手で、一村協同化による近代化農業に転換し、世界水準の農産物価でも充分儲かる農業とする必要があります。

斯くすることで、農村工業化も、農民のための工業も生まれるのであります。キブツ協同体の工業経営は、イスラエルの如何なる資本主義的工業も対抗できない力量を発揮しているといわれております。

搾取も不労所得も存在しないキブツ協同体の経営には、ストもなければ、対立闘争もな

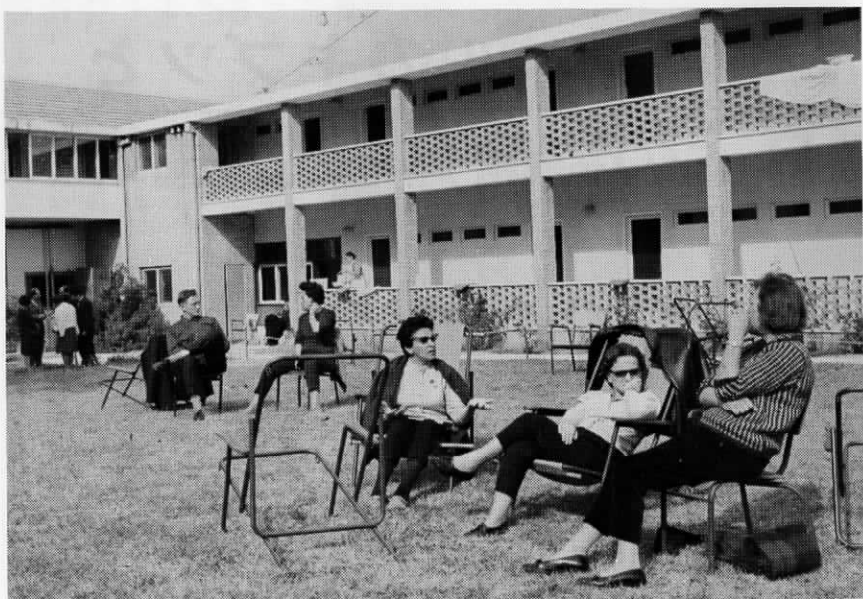
い、賃金も無ければ、失業もない、心の安定と営利を考えない、無欲心から、優れた製品が生まれ、他の追随を許さないものがあります。

従って何を製造しても良質、安価の高評が高く、あらゆる産業が、キブツ化に発展する傾向が顕著となっています。日本の農村も徒らに工業を誘致して、あたかも農村の余剰労働力を巧みに搾取される愚を選ぶべきではありません。一村協同体化なれば、どんな工業でも協同の力で運営できて、搾取の対象にはなりません。

六、キブツこそ本当の福祉社会

日本の個人農家は、無理と過激な労働や、不自然な食生活のために、農夫病という個人農業特有の業病が非常に多く、全国に五十万人と言われていますが中風患者の大半は農民であり、一家を挙げて悲惨な犠牲を払っております。農家の老人人などをみると、人の世のあわれさが身にしみて感ぜられます。

それがキブツ共同体では、近代化農業でありますから、仕事は機械がする。そして、誰でも一週六日、一日八時間労働であり、あとの十六時間は趣味に娯楽に勉強に休養に自由自在であり、栄養食満点であり、めったに病氣も知らないが、万一病氣になっても、怪我をしても老人になっても、医師も看護婦も、



キブツ・ギバアットブレネルのレストハウス

年中お抱えであり、何の不安も心配もない。そして、キブツの社会秩序は平等と古参順で保たれているので、病氣や怪我で入院しても、絶対平等公正であり、利害関係の汚れないから、誰でも良心と良心の交わりであり、気持がよいこと限りなしであります。

何事も古参順ですから、老人ほど優遇されるのです。そして、高度の生産能力で、高度の文化生活が可能であり、教育、養老、医療、音楽、娯楽、何でも至れり尽くせりであります。

イスラエルには、キブツの他に、キブツと個人農業の合の子というべき、モシャブ・シトフイーがあります。これは、生産、販売等、一切共同化していますが、生活だけは個々人で、一家の生活を営んでいます。病氣其の場合場合は徹底的に助け合っています。

これも、人によっては一種の

キブツと言っていますが、キブツとは区別されています。実は、日本農村には、このモシャブ・シトフイーが適当であるかも知れません。

また、その外にも、モシャブ・オブディムという日本の農協組織に似た、販売、購買、金融等だけ統一した組織があります。が、日本と違うところは、相互の助け合いが徹底しているのです。

だが、近代化した農工一体の理想社会を実現し、他の如何なる法人組織にも勝る企業体は、やはりキブツ共同体であります。なお、公害危機や、不労所得危機にも触れたいと考えておりましたが、予定時間の二時間を過ぎてしまいましたから、今回はこの辺で失礼いたします。ご静聴ありがとうございます。

▽この文章は、講演要旨を記憶を辿って書いたものであります。